

津山市史だより

2018.3
第11号



山根遺跡 南東方向からの遠景（正面の山の麓一帯）
旧出雲往来の鶴坂を西へ下りた所から臨む

津山市中北上にある山根遺跡は、吉井川支流の久米川左岸の河岸段丘上に位置する複合遺跡です。周辺には、山根1号墳や茶白山古墳なども点在します。

広域農道の建設にともない、岡山県教育委員会・久米町教育委員会によって昭和52年（1977）度後半に発掘調査が行われました。報告書によれば、40年前のこの年の冬も豪雪・寒波に見舞われ、悪天候の合間を縫っての発掘だったということです。

調査されたのは、広域農道が国道181号に接続する直前の長さ約150mの帯状のエリアのみでしたが、縄文時代にまで遡る生活の痕跡が確認されました。特に、弥生時代の集落跡は丘陵上ではなく平地で確認されたもので、それまで美作地域では例のなかったものとして注目されました。未発掘である周囲の水田の地下にも、集落が広がっている可能性が高いと考えられています。

遺跡周辺は古くから交通路の沿線であり、旧出雲往来のほか、JR姫新線、国道181号、中国自動車道が脇をかすめています。おそらくは弥生時代にも、重要な交通路が近くを通っていたものと思われます。（小島）

29年度第2回編さん委員会

2月19日 於郷土博物館

事務局から29年度の事業進捗状況が報告されました。年度末には別巻「つやまの民話」が刊行予定であることや新年度予算の内示状況も報告され、あわせて刊行スケジュールの確認が行われました。委員からは、委員会や編さん室と各専門部会との関係を明示する内規等の整備の必要性が指摘されたほか、新市長と委員長との面談機会の設定が要望されました。

部会通信

自然風土・考古部会

(部会長…河本委員、副部会長…可児委員)

発掘調査関係の新聞記事を集めています。沼遺跡(県指定史跡)の昭和26年当時の記事やその後住居が復元整備される記事などは大変興味深いです。昭和40年代後半以降は高速道路や工業団地等の開発に伴う発掘調査や遺跡保存のための調査が行われ、これら新聞記事からも津山の発掘調査の歴史が明らかになります。

近世部会

(部会長…定兼委員、副部会長…在間委員)

市内の個人所蔵資料の調査を継続中で、部会員および職員による個別調査も随時進めています。3月25日に部会を開催し、資料編・通史編の内容構成の協議や、資料調査報告を実施する予定です。

近現代部会

(部会長…在間委員、副部会長…香山委員)

2月12日に第3回部会を開催しました。資料編の第2次掲載候補資料について協議し、個人調査や多胡本家酒造所蔵資料の整理作業の進捗状況が報告されたほか、今後の個別調査の予定も協議しました。

編さん事業の経過 (平成29年12月)

12月9日 美作学講座第4回
12月10日 講演会「美作の謎」開催
12月24日 古代・中世合同部会
12月 「市史だより」第10号発行
平成30年

古代部会

(部会長…狩野委員、副部会長…今津委員)

12月24日に中世部会との合同部会を開催し、資料編の調整をしています。今後も引き続き、資料編刊行に向け、資料の選定などを行っていきます。

中世部会

(部会長…久野委員、副部会長…前原委員)

12月24日に古代部会との合同部会を開催しています。今後も引き続き、資料編の資料選定、並びに資料調査を行う予定です。

民俗部会

(部会長…前原委員、副部会長…安倉氏)

3月末に「つやまの民話」を刊行します。2月には福力荒神社祭祀調査を行い、3月13日～15日には、京都府立大学の学生さんと合同で調査を行いました。

来年度以降も、各地域での聞き取り調査を進めていく予定です。

津山市文化功労者受賞記念講演会

「美作の謎」

講師…三好基之氏



講演会場の様子

昨年12月10日、津山市文化功労者を受賞された三好基之氏を講師にお迎えして講演会を開催しました。当市の文化財行政に長年尽力された三好氏には、市史編さん委員長や中世部会長としてもご指導いただきました。講演では、美作の陶棺や古墳、美作国一宮の中山神社・二宮の高野神社などの研究中に疑問を感じられた点についての私見をお話しされました。

高野神社の本殿で古瓦発見



見つかった瓦（上）と古写真
社殿の全景（左下）と
棟瓦部分の拡大（左上）



本殿屋根の修理工事が行われている県重文の高野神社の本殿で、工事に先立って古い鬼瓦が発見されました。現在、本殿の屋根は銅板葺きに改められ、鬼瓦や棟瓦も銅製のものが使われていますが、かつては檜皮葺で鬼瓦や棟瓦は通常の瓦が使われていました（古写真参照）。



修理着工前の本殿 銅板葺きに改められている

今回見つかった瓦を古写真と比較すると、右上の写真の奥に写っているのが、上の古写真に見られる鬼瓦を分解したもののように思われます。それとは別に、手前に文字通りの鬼の顔をかたどった鬼瓦も写っていますが、これが今のところ、どの建物でいつごろ使われていたのか、手掛かりが乏しいため、はっきりとしません。いずれにしても、本殿などの古い時期の屋根の形状を伝える貴重な資料と言えます。

高野神社を撮影した古い写真など、手掛かりになりそうな物をお持ちの方がいらっしゃいましたら、編さん室（☎22―5820）までお知らせください。

竈——カマド——雑感

その2・・・もう一つの煮炊き道具——土製支脚——領家遺跡の報告書から——河本 清

『津山市史だより』第9号で津山市領家（旧久米郡久米町領家）の領家遺跡（注1）の発掘調査報告書から古墳時代の竪穴住居の壁際につくられた造り付けカマドについてみてきました。領家遺跡は1972（昭和47）年に中国縦貫自動車の建設に先立っての発掘調査ですから、今から46年も前のことです。岡山県教育委員会でも発掘調査体制もその整理体制も不十分な条件のなかでの調査であり報告書の作成ではありませんが、この遺跡で初めて古墳時代のカマドがみつかったことを少しおおげさに書いた感がありました。しかし、その後、津山市教育委員会が発行された報告書をみると、竪穴住居に造り付けられたカマドをもったイエは大開遺跡（注2）の他、天神原遺跡・東蔵坊遺跡・大畑遺跡などで知られています。使用された時期は6世紀後半から7世紀初め頃にあたります。津山市域ではその出土例は少ないようですが、西や東の丘陵部の調査で点々と知られており、意外に広く定着していたと思います。

さて領家遺跡では、住居に造り付けられたカマドのほかには煮炊き用具として土師質の移動式カマドが2区の字中畑から出土していることも知りしました。このカマドは住居に固定されたものではなく、住居のなかをもち運びして自由に備え置くことのできる煮炊き道具であります。今でも正月餅を搗く時に湯釜に蒸籠^{せいろう}をのせて糯米^{ももこめ}を蒸しますが、その時、戸外で使う金属製のカマドの祖先といったものです。この土師質のカマド片はその後の整



第1図 移動式カマド
高さ 3.5 cm、底部幅 50.05 cm
(文献3 改変)

理作業で復元できたかどうか知りませんが、貴重な遺物の一つであります。近年の調査では苦田ダムに先立つ事前の調査で苦田郡奥津町久田原遺跡（注3）では竪穴住居30から出土しています（第1図）。住居の平面は1辺5m前後の方形で、その南西隅から移動式のカマドが土師器甕とともに出土しています。調査者小嶋善邦氏は「カマドの焚き口方向が南を向いていることから、使用時の状況とは考えられない」（注4）としています。住居の床面のほぼ中央には径50cmばかりの焼けた跡がみられます。この焼け跡でカマドは使った痕跡がつかめれば最良でしょうが、そういった証拠は残っていないようでした。因みに住居30では造り付けカマドはありません。ここで使われなくと



第2図 領家遺跡出土・土製支脚

も他のイエで使ったことも考えられます。いずれにしろ持ち運びのできるこのカマドは大切に取扱われたことが知られます。時期は6世紀後半の古墳時代後期のものであります。領家遺跡2区出土のものはこうしたものと同じものと思われる。領家遺跡ではこうして2種類の煮炊き用の道具が出土していることがわかりました。

ところが、領家遺跡の報告書を詳細に見れば第3の煮炊き道具であります土製支脚^{どせいしきやく}1点がみられます。「第25図 建物7柱穴出土」（注5）として土器を左に示し、右に土製支脚の図を掲載しています。建物7は遺跡調査区の東北部でみつかったいます。保存されている久米廃寺に近いところに3個の柱穴がほぼ東西に並んで発見されています。



第3図 山根遺跡出土・土製支脚



第4図 山根遺跡出土・土製支脚

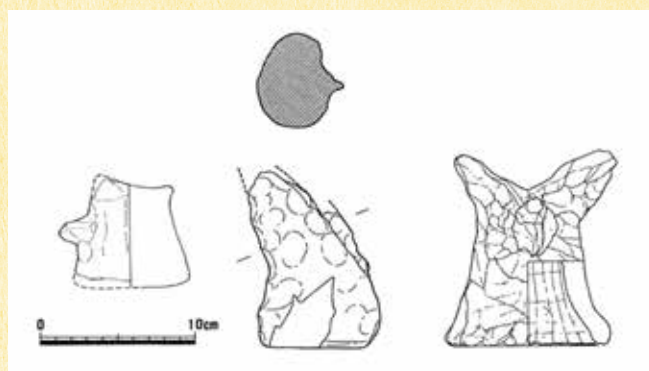
その相方となる柱穴は北の用地外になると記述されていますので、建物は梁行2間、桁行きは不明ですが、柱間は数間の掘立柱建物が想定されます。土製支脚と土器片はこれらの1柱穴内より出土した、とあります。建物の時期は古墳時代初頭の頃とされています。土製支脚は「上部にある3本の突出部の1本が欠け、台部下半が欠失している。」(注6)としています。現在は復元しています(第2図)。土製支脚の胴部は粘土でかため、下半は裾広がり、円形の底部となる形で、その径10・8cm、高さ11・1cmを測ります。この胴頂部に3方向にのびる突起をつけています。その内の二股に分かれて組となる、1方の突起(腕ともいう)は石膏復元しています。二股間の間隔は約10cm。残存しているその先端部の高さ12・5cmです。後ろの突起(以下背面突起とする)は良く残っています。その高

さは12・8cmで腕の高さと変わりありませんが、側面の形状は先端を尖らすように上向きとなっています。あたかも片手でつかんで作業しやすい状況がうかがえます。復元での石膏入れは全体の約3分の1ほどですが総量1・04kgあり、その使用時の重さには耐えうると思われます。この道具の使用方法は、第6図にみられるように、二股側に土師器の甕や鍋などの煮炊き容器を添え置くよう、2ないし3個の支脚を組み合わせて煮炊き台とし、その底の隙間に小枝を焚きくべて使用したものとして、美作地方でもごく普通の家庭で使われていた火鉢に鉄瓶やヤカンなどを掛ける時に用いた、五徳のような使い方をしたようです。ところが、その後の調査で同じような形態をした土製支脚が出土しました。場所は領家遺跡から西へ直線距離で約5・8kmの位置にある山根遺跡(注7)です。津山か

ら西に向けて久米川沿いに走る国道181号が坪井集落を抜けてJR姫新線をまたいで美作追分駅に向かう、その北斜面に当たる場所です。津山市中北上(旧久米郡久米町中北上字山根)に所在します。遺跡は縄文晩期から近世にわたる遺物が出土した複合遺跡です。1977(昭和52)年、広域営農団地農道建設に先立っての発掘調査でした。ここでは調査1区の土器溜り1から、古墳時代中・後期から奈良時代前半の土器群に入り混じって土師器甕や甑の把手とともに土製支脚2個が出土しています(第3・4図)。第3図の支脚は、腕や背面突起は欠損しています。現存高約12cmばかりですが、胴下半は空洞(中空)で底部は円形に復元でき径約10cmです。第4図は、胴部の現存高10cm強です。2本の腕は5・6cmの長さでハの字状にななめ上に向けて延びています。その腕先までの高さは約13cmです。土師器の甕や鍋などの煮炊き用器を支える2本の腕間は最大で約10cmあります。背面突起は破損しています。胴は中空に作られ第3図とはほぼ同じような形をしたと思われます。時期の決め手は土師器の甕や甑などと共伴するものとして、古墳時代後期にあたる6世紀後半から7世紀前半に属するものと推定されます。遺跡は久米川上流の狭小な平野の左岸に所在しています。古墳時代の住居跡は知られていませんが遺物は5世紀末からの須恵器が出土しています。調査者岡田博氏はこの地は「古墳時代の継続的な生活の場であった」(注8)と記しています。土製支脚はそうした生活の場の煮炊き道具として使用したことが当然想定されます。美作地域では土製支脚が知られているのはこの2遺跡のみでしたが、最近

になって久米郡美咲町内の遺跡から1例出土していることを知りました(注9)。

さて、県内でいち早く5世紀前半の古墳時代中期になって堅穴住居に造り付けカマドを取り入れた県南部での土製支脚の出土状況はどうでしょうか。すべての遺跡の報告書に目を通すことはできませんので、岡山市津寺遺跡の報告書から探ってみました(注10)。津寺遺跡は山陽自動車道と岡山自動車道が接続するジャンクション部にあたる所で、いわば原始・古代の吉備の中枢の一角を占めた地といえる所です。遺跡はもともと水田地帯でしたが、津寺遺跡だけでも南北約1km、東西約500mという道路敷内を線状に発掘しました。その調査面積は約8・7万㎡という途方もない広い面積の発掘調査でした。ここでは古墳時代の前

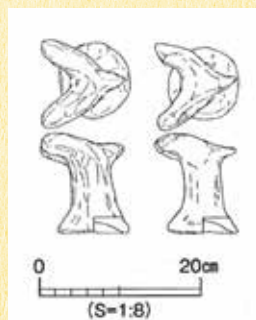


第5図 津寺遺跡出土の土製支脚(左からA・B・C)
(文献10の③改変)

期にあたる4世紀代の堅穴住居252軒を確認しましたが、中期の遺構は希薄で堅穴住居も少なく27軒ほどにすぎません。しかし、古墳時代後期になる6世紀から7世紀初めにかけては、再び人々の動きは活発になり、堅穴住居168軒を調査により確認しました。出土遺物も膨大な量の土器をはじめとして金属器・木器などでありました。ところが土製支脚は、破片を含めて図面として描かれているものは24点であります。土器に比べて大変少ないと思います。しかし、その形状は、領家遺跡や山根遺跡のように1種類ではなく、第5図のようにA・B・Cの3種類に分類された、形状の違う支脚がみられます。図のBは四国北西部に多いそうです(注11)。このように津寺遺跡では、数は少ないですが吉備以外の地域から形状の違う多種類の土製支脚が導入され使用しています。これには当時の文化や人の交流の大動脈といえる瀬戸内海に直結する児島湾岸に面した津寺遺跡の立地条件がその要因といえましょう。時期別の内訳は前期のもの19点、後期のもの5点であります。出土場所は住居内埋土から3点ありますが、大多数は遺物包含層・溝・古墳時代前期の水田や土器溜まりといったところから出土しています。それにしても造り付けカマドをまだ住居に取り入れていない4世紀代の古墳時代前期、津寺遺跡では同時期に全て住居を構えたとは到底考えられません。が、およそ1000年近くの生活のなかで煮炊き道具10数点というのは少なすぎます。他に道具があったのでしょうか。調査者の一人亀山行雄氏は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて堅穴住居内に設けられた「中央ビットは灰穴炉、付設さ



第6図 出土した土製支脚・土師器甕・土師器甑から復元した煮炊きセット
6～7世紀(文献13の①改変)



第7図 松江タイプの土製支脚
(文献13の①改変)

れた土壙は炊爨^{すいさん}の場」と想定しています(注12)。つまり土製支脚とともにこうした土壙をもつ住居で煮炊きしたということですが、集落内の煮炊き遺構についてはいろいろ検討されています。ようですし、今後の課題とし別の機会に検討したいと思います。

島根県松江市内の遺跡(注13)では、6世紀末から7世紀前半の集落から山根遺跡や領家遺跡と同じような型(タイプ)の土製支脚が移動式のカマドや甑などとともに出土しています(第6・7図)。しかも、ここでは造り付けカマドは伴っていません。最近の調査事例であります島根県大田市の市井^{いちい}深田^{ふかだ}遺跡の発掘調査パンフレット(注14)では、古墳時代から奈良・平安時代にかけて

の煮炊き用具の違いを色分けして示しています。それによりますと島根県の山間部では、主に造り付けカマドを用いる地域とし、大田市や松江市などの海岸部は移動式のカマドや土製支脚を主に用いた地域としています。加えて、地元新聞である山陰中央新報の文化財関係記事(注15)によりますと、山陰地域の土製支脚は「出雲タイプ」と「松江タイプ」の2タイプに地域分けされるようであります。その違いは頂部に背面突起が有るか、無いか、のようであります(第7図)。つまり領家遺跡や山根遺跡のタイプは土製支脚の頂部は腕2本と背面突起を有していますので「松江タイプ」に類似しています。領家遺跡出土の時期をふくめて、今後の検証が必要ですが、図らずも「松江タイプ」をもつ二つの遺跡は、後の旧出雲街道沿いに所在しています。道具の移動や文化の流入は人の移動を伴う場合とその影響のみが考えられますが、土製支脚からみられる遺物の移動は出雲東部との関係を示唆するものとして、興味深い遺物であります。

このように久米領家遺跡では、生活の基本であります食にともなう直接的といえる考古資料は住居内に築かれた①造り付けられたカマド、②持ち運びの可能な移動式カマド、③組み立て式の土製支脚、が出土していることがわかりました。古墳時代の煮炊き道具3点セットともいえる施設や道具を使用していた、ということでもあります。こうしたカマド施設や道具の導入と使用は、古墳時代後期のこの地域のイエ(住居)の様式やそれらの集合体であるムラ(集落)の構成ならびに形態にどんな変化を及ぼしたかという課題は、今後の調査と研究をまっことにしましょう。

注ならびに引用・参考文献

- 1 栗野克己・山磨康平「領家遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』岡山県教育委員会 1975
 - 2 平岡正宏「大開古墳群・大開遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集』津山市教育委員会 1994
 - 3 田裕美ほか「津山市史だより」第9号では「注2行田裕美ほか」としていたが、筆者河本の誤りで、行田裕美氏は調査担当者の1人であるが「例言」に記されているとおり、報告書の執筆・編集は平岡正宏氏である、ことを訂正しお詫び申します。
 - 4 小嶋善邦ほか「久田原遺跡・久田原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184』国土交通省 苦田ダム工事事務所・岡山県教育委員会 2004
 - 5 注3 頁232
 - 6 注1 頁313
 - 7 岡田博「広域営農団地農道建設に伴う山根遺跡発掘調査報告」岡山県久米町教育委員会 1979
 - 8 注7 頁37
 - 9 中野雅美氏確認。久米郡美咲町の町史編纂に伴う資料調査中に中野氏が確認されたものを津山市教育委員会の会議後、宮崎絢子氏から教示された。後日、中野氏から詳細について教示を受けたが、出土場所は不明であるが、合併前の地元(久米郡中央町か、それ以前)から出土し、現在の資料室に保管されてきたことは間違いない、とのことである。記して感謝の意を表す。また、小文を脱稿後真庭市北房町所在(旧岡山県上房郡北房町大字皆部字桃山で旧備中国に属す)の桃山遺跡から2点出土していることを知った。
 - 10 津寺遺跡に関する報告書は下記の5分冊からなる。
 - ① 三手遺跡・津寺遺跡『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90』日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1994
 - ② 津寺遺跡2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1995
 - ③ 津寺遺跡3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104』日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1996
 - ④ 津寺遺跡4『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116』日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1997
 - ⑤ 津寺遺跡5『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127』日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会 1998
 - 11 注10の③文献 頁233
 - 12 注10の⑤文献 頁717の注3
 - 13 丹羽野裕①「洪山池遺跡・原ノ前遺跡」・丹羽野裕②「四ツ廻Ⅱ古墳」『松江市史 史料編2 考古資料』松江市市史編纂委員会 松江市 2012
 - 14 しまねの遺跡 発掘調査パンフレット5「市井深田遺跡」島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015
 - 15 岩橋孝典「古代の台所にみる出雲と他地域の交流」『いまどき島根の歴史26』山陰中央新報 2017年10月17日付
- 小文を作成するにあたり岡田博氏からは島根県の発掘調査関係資料や新聞切り抜きコピーなどを頂きました。また、遺物を収蔵・保管している津山弥生の里文化財センター並びに同職員仁木康治氏には土製支脚の実見ならびに写真撮影等について便宜を受けました。記して感謝の意を表します。
- (市史編さん委員・考古編担当)

津山市教委（生涯学習課）・美作大学共催

美作学講座

— 津山市史関連研究から —



第4回の会場の様子

第4回「津山藩主松平家の明治維新

— 版籍奉還後の土地集積をめぐる — 12月9日

尾島 治（編さん室長／近世編担当）

今年度の最終回は、編さん室長の尾島が講師を務めました。維新期を経て大名華族として近代を生きた旧藩主家の財政基盤の一つに、旧領での地主経営があります。大名華族による大土地所有は、いづどのようなように形成されたのか。津山松平家による、版籍奉還後の旧領での土地集積過程の一端を明らかにすることでこの問題に迫る、という趣旨がまず説明されました。

明治3年（1870）の後半、松平家では藩との公私の別を意識し、私有財産の確認作業を進め、家政財政の健全化への動きを見せ始めます。具体的な土地集積が見られるのは、この年の閏10月で、下屋敷の払い下げによる資金で開拓が始まりました。

農民からの土地購入は、地域の有力農民を引受人として、近隣の複数の所有者からまとめて一括購入しており、その時期が12月や3月に集中していることから、年貢や税の納付のために売り払われたと考えられます。また、家令・家扶などを中心とした旧家臣の働きも重要でした。地主経営の収入については、津山銀行など地元への投資が多く、士族の共済事業を担っていたと考えられる共済社にも多額の出資がなされているということです。

おわりに、松平家の土地集積の背景には、家令・家扶など旧家臣の忠誠心に基づく働きや、農村の村役人層を世話役として、小作料の収納役としても活用したことなどがあつたとして講演を締めくくりました。

※平成30年度も、これまでと同様に市史の関係者を講師にお迎えして4回開催しますので、ご期待ください。

◆別巻『つやまの民話』刊行のご案内

3月末に、新修津山市史の別巻『つやまの民話』を刊行できる運びとなりました。

民話は、生活の中で語り継がれてきたもので、語り継がれなくなると消えてしまいます。本書の執筆者の立石憲利先生は、長年にわたり各地で数多くの民話・伝説などを採録し続けてこられました。平成26年から立石先生に調査・執筆を依頼し、多数の市民のご協力によって刊行される本書により、かなりの数のお話を後世に伝えることができます。

市内では、民話の語りを行う方々のネットワークが広がっています。そうした方々をはじめ、ひろく市民の皆さんに目を通していただきたいと思います。

頒布方法などの詳細は、編さん室へお問い合わせください。

津山市史だより 第11号

発行：平成30年3月31日

編集：津山市史編さん室 〒708-0022 岡山県津山市山下92 津山郷土博物館内
TEL：0868-22-5820 FAX：0868-23-9874
Eメール：tsu-haku@tvvt.ne.jp